

新設された大規模の某一貫製鉄所において見られる如く、LD 転炉の大型化並びに全く平炉なしの転炉のみによる製鋼設備の傾向と相俟つて、今後周到な計画によつてこれが育成完備を図るならば、上記長期振興計画に示された LD 純酸素転炉による 65% 生産もその実現が十分に期待し得るものと信ずる。

その昔、北筑洞海湾の片ほとり枝光村(後の八幡)に落

された種子の芽生ベセマーの若木が、東下りして六郷の川辺川崎渡田に移し接がれてトーマスの樹となり、今や水江から戸畑、輪西、千葉から、尼崎、広畑、小倉、神戸に、更に和歌山、名古屋と津々浦々まで LD 純酸素転炉の花盛り、まさに日本鉄鋼業の誇らしき旗手たらんとしている。半世紀を回顧して感慨まことに無量なるものあり、敢て秃筆を呵する所以である。

(正会員・元評議員)

回 顧 と 展 望

田 畑 農 夫

明治 44 年郷土に秋田鉱山専門学校が新設され、私は第 1 期冶金学科卒として大正 3 年三菱合資会社に入社した。当時三菱は朝鮮黄海道鉄鉱源と平壤無煙炭を主原料として製鉄所を兼二浦に新設すべく、河村驍博士を主班として計画されつつあつた。私は鉱専の海外進出第 1 号である。先づ技術習得のため八幡製鉄所に外来研究員として同年 7 月赴任した。その頃は東田第 4 高炉が建設中であつた。鉄鋼協会は翌年創立し、最初の会員となり、今や 50 周年を迎える幸運を得たのである。兼二浦には大正 6 年から昭和 13 年に至る迄三菱製鉄から引続き日本製鉄の技師として製鉄部門を担当した。その間褐鉄鉱単味の製鉄法を確立し、また普通銑から低磷銑の製造法を研究開発、炉壁煉瓦の侵蝕に対処し、炉体全部を強制冷却して成品ベースに乗せることができた。当時大宝無煙炭の微粉吹込を行つたが不成功におわつた。昭和 12 年日支事変勃発以来軍の要請によつて北支製鉄の調査団(中松日鉄副社長が主班)の一行に加わり、満州から北支、河北、河南、山西、蒙疆等生々しい戦場を視察した。北京西郊に石景山製鉄所あり、工事半ばにて中止されてあつたが、日鉄及興中公司協力の軍管工場として再出発に決定、その所長として同 13 年 4 月赴任し、同年 10 月平生経済最高顧問、北支総司令官臨席のもとに第 1 高炉火入式を挙行した。その後北支製鉄所設立のため、北京大使館の

委嘱によつて立地条件その他を調査立案した。昭和 18 年北支製鉄会社が創立されたので、日鉄に復す。その後北支那開発、大東亜省の囑託或は社命直命によつて海外製鉄所の技術指導に當つていた。昭和 20 年風雲急を告ぐるに當り、京城事務所の技師長を命ぜられ、東京が焦土化された翌朝出発したが、間もなく終戦となり、引揚者となる。回顧すれば人生の大半はアジア大陸の製鉄業の開発に奉仕した。今日海外の情報によると兼二浦、石景山製鉄所は何れも近代化され、数百万 t 級の大製鉄所に拡張せられつつある。もつて瞑すべきか。終戦後はパージ、昭和 21 年 10 月より秋田大学の教授として鉄冶金に明け暮れること 13 年、停年後は大阪製鋼の相談役、同 38 年末引退す。今や本邦の製鉄業は基礎産業として総力を挙げて拡充を計つた。昭和 39 年前半期の成績は前年の同半期に比し、生産量は世界第 3 位、生長率は世界最高であり、本邦の輸出ブームに乗る鉄鋼の比重は増大しつつある。鉄鋼会社の資本費原料依存率は他国に劣るも、生産の合理化、技術の向上の賜と関係各位に深甚の敬意を表す。申す迄もなく技術革新は刻々進展する。今後の研究部門の強化を確立し、国内の技術提携の円滑化、また応用研究の早期実現は幹部責任者の英断に待つものが多いと確信する。本邦の技術が各国に主導権を獲得する日の近からんことを切望するものである。

(正会員・元評議員)

回 顧

田 村 宣 武

鉄鋼協会が創立以来年毎に目覚ましい発展をつづけ、茲に 50 周年を迎えたことは誠に同慶の至りである。顧みると、私が協会に入会してからも既に 43 年にもなる。思えばこの長い間協会のお世話になり、今もなおその恩

恵に浴していることは全くありがたい次第である。ところで、この長い間これというお手伝いもできなかつたが、只一つ印象に残つておるのは戦争末期の協会のことである。或る日俄国一先生が私を呼ばれて、戦局がどうも面

白くない。この際鉄鋼協会は全面的に軍に協力して戦局打開に些かでも貢献しなければならん。君は軍の研究所におるのだから、軍の内情をよく知っている筈だ。協会のことをよろしく頼むよといわれた。当時軍の研究所としては協会の多数の方々のご援助を仰いで急速な開発研究に献身的なご努力をお願いしておつたのであるが、さて協会のこととなるとそれ以上の重荷であつた。会員諸君の貴重な論文は沢山あるのに用紙の配給は激減されるし、印刷能力は益々不足、その上会費の集まりは予想外に悪くなつて、協会の悩みは並大抵ではなかつた。会長は故吉川博士であつたが、これには随分頭を悩まされた。しかし貴重な論文は何としても発表せねばならん、役員各位奮励努力せよとは言われなかつたが、皆一生懸命で

あつた。幸い会誌の発行もつづけることができ、また地区毎に論文の発表が盛んに行なわれたのは何より喜ばしいことであつた。その当時の会誌といえば、ザラ紙 24~26 頁位のもので、図表写真を主として要点を簡潔に記述し、表紙までも利用したものである。今その会誌を見ると全く感慨無量である。あの丸の内の赤れんがの建物、燈火管制下の夜空にうす暗く浮び上つた高い建物の一室で、役員の方々とともに協会の使命達成に努力し、聊かなりとも俵先生のご信頼に答え得たかと思うと心の安まる思いがする。《筆者は、昭和 19 年 4 月から 20 年 2 月地方へ転住するまで副会長、現在日本パーカライジング株式会社大阪熱処理(タフトライド)工場長》

(正会員・元副会長)

日本鉄鋼協会創立当時を回顧して

長谷川熊彦

私は、かような題で執筆する資格も能力もありませぬが、ご指名を光榮として紙面を汚すこととなりました。強いて申せば、私が命長く生き延び本年(昭和 39 年)3 月で満 81 才に達し、明治 42 年東大卒で 6 年前に 50 周年同窓会を椿山荘で開き得、日本鉱業会から 50 年以上の会員優遇として数年以前から会費を免除され、私事で恐れ入りますが 5 年前に金婚式祝賀を行なつたことなど、敬老の立場にあることを自己紹介させていただきます。鉄鋼協会創立以来の会員であります、何等お役に立つようなこともいたさず、慚愧の至りであります。会の創立当時には、九州に在職しており、直接何もお手伝したこともありませぬ。若年技術見習生みたようなもので、諸先生先輩諸家のご努力される概況を聞き大変喜ばしく思いました。以下書き下します内容は、私自身の主観を元としおぼろげな記憶を綴つた小品に過ぎませぬ。

明治新政府によつて奨励された科学技術の振興や産業開発は、海外から輸入された科学技術は適当に咀嚼消化され、わが国独自の何ものかが産れつつあつたと思ひます。大学の充実整備とか学会協会の設立、研究機関の創設等が明治 30~40 年代に実現し、大正、昭和に推移するに従つて何れも増設拡大され分割細微されております。例えば、工業に関する最初の学会は、日本工学会であり、その細分されたものが機械学会、電気学会、工業化学会、日本鉱業会...でありました。日本鉄鋼協会は、日本鉱業会から分離独立し、後に鑄物協会、溶接協会、熱処理技術協会等が鉄鋼協会から分離独立しておりま

す。日本工学会を發祥としてその子その孫玄孫と系統され、大正、昭和時代は、その孫玄孫に相当する繁昌と思ひます。

鉄鋼協会が創立されたのは、大正 4 年 2 月で翌 3 月に会誌第 1 号が発行されています。最初は、発起人および理事制度で出発し、野呂景義博士が理事長として会を代表され、翌大正 4 年から 7 年まで初代の会長に就かれました。東京大学工学部教授俵国一先生を筆頭として多数理事の方によつて会は運営されており、事務の中心は、東京大学工学部冶金教室に置かれておつたと思ひます。

大正の初年頃には、わが国製鉄製鋼業界は、相当に完備され、経営面技術面ともに世界水準に接近していたと思ひます。釜石の如き、わが国製鉄の元祖を初め、官立八幡製鉄所は、その作業順調に進められ、拡張に次ぐ拡張の時代であり、また北海道輪西とか日本鋼管会社とかまた中小製鋼所等の創設される有様でありました。特に陸海軍の幹部諸將軍提督の間では、軍機の独立が強く主張されて独自の工廠で鋼材や兵機が製造され、また盛んに研究されておりました。従つて多数の専門技術者が全国に散在しており、官民ともにわが国の富国強兵主義を叫ばれた時でありました。鉄鋼協会設立の動機もまたこの社会情勢に順応したものと思ひます。

鉄鋼協会創設当時に、鉄鋼関係の専門技術者先輩諸先生で私共若年者をご指導を受け、会の創立に直接間接ご尽力下さつたと回顧されるお方を名簿(東京大学工学部冶金学科同窓名簿)から拾つて見ます。位階、称号、職